広告　企画・制作　LEXUS NEW TAKUMI PROJECT 実行委員会

しずおかの森の恵みから、霊峰富士の姿を挽き出す

百瀬 聡文　静岡県／挽物師

「LEXUS NEW TAKUMI PROJECT」（主催：レクサス）は、日本各地で地域の独自性や技術を生かし、新しいモノづくりに挑む「匠」を応援する。

レクサスが日本全国の「匠」のモノづくりを応援

プロジェクトのスーパーバイザーに、放送作家として多くのヒットを手がけ、くまモンの生みの親でもある小山薫堂氏を迎え、隈研吾氏（建築家／東京大学教授）、グエナエル・ニコラ氏（デザイナー）、清川あさみ氏（アーティスト）、生駒芳子氏（ファッション・ジャーナリスト／アート・プロデューサー）、下川一哉氏（意と匠研究所）らをサポートメンバーに発足。第1回となる今回は、全国47都道府県から地域推薦、一般公募合わせて52名の若き匠が選出された。

昨年夏、レクサスギャラリー高輪で行われたキックオフ・セッションを皮切りに、サポートメンバーが実際に工房を訪ねるエリア・コンサルティングを重ね、匠は自身のアイデアを磨き、プロダクトづくりに取り組んだ。「本当に欲しくなるプロダクトか？」「地域のオリジナリティーはあるか？」「コンセプトやターゲットは明確か？」など、サポートメンバーからの真剣なアドバイスを受け、匠は約1年間の試行錯誤を経てプロダクトを完成させた。

1月18日に都内で行われたイベントでは全国の百貨店、セレクトショップのバイヤー、メディア、デザイン関係者などに向けてプレゼンテーションを実施。世界へ羽ばたく足がかり、ビジネス拡大のきっかけとなるチャンスを手にした。

「伝統」を守りながら「新しい」感覚やテクノロジーを吹き込む―。「地域」の特性を深めながら、その魅力を「世界」へ広く発信する。日本のモノづくりを支え発展させ、そこから新しい価値を生み出そうとしているレクサスのブランド思想の1つである「二律双生」を、地方創生×モノづくりの視点で実現するプロジェクト、「LEXUS NEW TAKUMI PROJECT」。静岡県選出の匠、挽物師・百瀬聡文さんの思いと、完成したプロダクトを紹介する。

1月18日、プレゼンテーションにて

作品プレゼンをする百瀬さん

スーパーバイザー
小山 薫堂氏

1964年6月23日　熊本県天草市生まれ。日本大学芸術学部放送学科卒。「料理の鉄人」や「ニューデザインパラダイス」、映画「おくりびと」など数多くのヒット作品の企画・構成に携わる。「くまモン」の生みの親でもある。

先細りする伝統技法「静岡挽物」

徳川家康公のお膝元、静岡市には、駿府城や、浅間神社、久能山東照宮の造営など国家的なビッグプロジェクトをきっかけに、全国から一流のモノづくり職人が集められた歴史がある。1864（元治元）年から始まったとされる静岡挽物も、高度な加工技術集団、駿府の匠（たくみ）の間で磨かれた伝統加工技術だ。連綿と引き継がれた匠の技は、第二次世界大戦後、胡椒挽きや家具の部品など、日用品として欧米に盛んに輸出されたが、機械加工の台頭により衰退の一途をたどり、現在では職人も数えるほどに減ってしまっている。

山あいに建つ工房

百瀬さんは、同市内のデザイン専門学校を卒業後、静岡市の伝統工業後継者育成事業を利用し挽物の技術を習得。同市内の工房で修業を積み2011年に同市清水区で自らの工房を立ち上げた。高級家具などの部品の加工を手掛ける傍ら、ホームウエアプロダクトブランド向けに、スケートボード型の花瓶など意匠性の高い作品を提供している。百瀬さんは「注文で100個作っても、買ってくれる人が手に取るのは1個。どの1個が手に渡っても挽物の魅力が十分伝わるように丁寧な仕事を心掛けています」と語る。

軟らかいヒノキに慎重に刃物を当てる

1合の米を量る

今回のプロジェクトに取り組むに当たり、地元に伝わる技術の継承者としてプロダクトに込めた思いがある。「静岡挽物の存在をもう一度知ってほしい。挽物は過去の技術ではなく、これからも多くの人の生活を豊かにできるということを伝えるのが自分の使命だと思いました」と百瀬さんは語気を強める。

挽物で何を作れば自分のメッセージが伝わるのか、なかなか答えが見つからなかったという百瀬さん。「ある日、妻が米を量る音が台所から聞こえて『これだ』と直感しました。米を量る1合カップこそ、日本人の原点だと気が付いたのです。正確に1合量るための加工技術には自信がありました」。毎日の生活に欠かせない道具に、これまでにない意匠性を吹き込もうと考えた百瀬さんは、静岡県が世界に誇る富士山をデザインのモチーフに選んだ。「静岡の代表という意識を持った瞬間、富士山を取り入れたいと決めていましたから」と振り返る。

材料は富士山麓のヒノキを選んだ。伐採や製材にも立ち会ったことで静岡の森を育てる人たちの思いを感じたという。針葉樹は年輪を形作る冬目と夏目の密度が異なる上に、広葉樹より軟らかいため、加工が難しく挽物には向かないが百瀬さんはあえて針葉樹にチャレンジした。「木が堅すぎて刃物が駄目になるなら道具を研ぎ直せばいい。しかし素材が途中で割れてしまえば、一からやり直し。針葉樹用の刃物作りから始めなければなりませんでした」。職人の腕が試される時間が続いた。

プロダクトに静岡らしさを込めるため、知人の染色職人の力を借りて茶染めにも挑戦した。タンニンの作用で深い黒色に染まった木地には木目が残り、漆塗りとは違った表情を作り出す。「煮出したお茶に漬けて染色するので、歪みや割れが心配でしたが、大丈夫でした」と話す百瀬さん。新しい加工技術の習得にもつながったという。

完成プロダクト「ICHIGOU」～日本人のヒトキト～　hikimonojo639.com

道具は全て自作する

使う人の生活を思い描く

エリア・コンサルティングでは、サポートメンバーの下川氏から、米を量るだけでなく、アクセサリーを入れたり、重ねてオブジェとして飾ったりと、プロダクトの可能性の広さについてアドバイスがあった。「手に取る人の生活まで思いを巡らせることがストーリー性の高いプロダクト作りには欠かせないと教えられました。指示された物を丁寧に作ればそれでいい、ではこれまでの職人仕事から脱皮できない。これからの自分の生き方のヒントをもらいました」と語る。

下川氏とのエリア・コンサルティング

日本のモノづくりを元気にしたい

百瀬さんはプロダクトを「ICHIGOU」～日本人のヒトキト～と名付けた。「手に取って使ってもらうことで、自然と共存し豊かに暮らしてきた日本人の記憶を呼び覚ましたい」と語る。プロダクトが評価されれば、消費の低迷、後継者不足という悩みに直面している林業、農業、伝統加工業に注目が集まり、新しい活路が見いだせるはずと確信しているという。

1月のプレゼンテーションまでの1年間を「刺激にあふれた体験だった」と振り返る百瀬さん。「日本各地で伝統技術を広めようと試行錯誤している僕たちの思いを、プロジェクトという形で結集させた今回の試みは、若い匠たちが目指すべき方向を示してくれました。僕たちは地域に戻って仲間を増やし、日本のモノづくりがもう一度元気を取り戻すために行動しなければ」と決意を新たにしている。

百瀬 聡文
静岡県／挽物師

1983年生まれ。静岡デザイン専門学校卒業後、静岡市伝統工芸技術秀士の挽物師　岸本政男氏、真紀氏に師事。2010年山間の古民家（築150年）を拠点とする。11年「挽物所639」を設立。2013年moyocami gallery をオープン。木工ろくろ、旋盤を使い、木の皿など丸いものなら何でも製作する。数十年前は大勢いた挽物師も今は数えるほど。静岡挽物を広めるため、今できることに挑戦している。

LEXUS NEW TAKUMI PROJECT